



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 日本語翻訳におけるforeignizationとdomesticationのストラテジー：オスカー・ワイルドの作品翻訳をめぐって                |
| Author(s)        | 佐藤, 美希  |
| Citation         | 国際広報メディアジャーナル, 2, 185-203   |
| Issue Date       | 2004-03-31  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/35586">http://hdl.handle.net/2115/35586</a> |
| Type             | article (author version)  |
| File Information | sato-3.pdf  |



[Instructions for use](#)

日本語翻訳における foreignization と domestication のストラテジー  
— オスカー・ワイルドの作品翻訳をめぐって —

佐藤美希

Translation Strategies of Foreignization and Domestication  
in Japanese Translations of Oscar Wilde's Works

Miki SATO

This paper attempts to apply the notion of translation strategy discussed in the field of translation studies to a Japanese context. While translation studies mainly deals with two strategies, foreignization and domestication, there has been no such approach discussing translation in Japan despite there having been similar attitudes of translation toward original texts. In this paper, these strategies are explored, both in Western and Japanese contexts, followed by analyses of two of Oscar Wilde's works, *The Importance of Being Earnest* and *Salome*, as examples of those strategies.

Recent Western viewpoints tend to prefer the foreignization, with the dominant attitude in Japan also regarding what can be called foreignization as a good translation. However, the normative foreignization strategy does not always function sufficiently in Japan. This paper argues that translation should decentre the institutionalised and dominant norm of receiving foreign literature in order to raise the possibility that the text can be opened indefinitely.

## 1. はじめに

日本は特に明治維新以降、自国近代化のために西欧文化の翻訳を積極的に行い、その西欧志向の翻訳熱が現在まで続いているという点で、他国の翻訳をめぐる状況とは一線を画している部分があることは、亀井俊介によって指摘されている。<sup>1</sup> 英語で書かれたテキストは、非英語圏では日本が最も多く輸入している。<sup>2</sup> にもかかわらず、日本で翻訳の問題が研究対象となることは多くなかったと考えられる。一方、翻訳の出版量が極めて少ない英米において、<sup>3</sup> 翻訳が *translation studies* という枠組みで体系的に研究され始めている。

そこで、本稿では、近年欧米を中心に発展している *translation studies* を英文学作品の日本語訳の場合に応用することを試みる。具体的には、近年 *translation studies* において論じられている *foreignization* と *domestication* という二つの戦略に注目する。日本ではこれまで様々な翻訳論が述べられているが、明確な戦略という観点は取り入れられてこなかった。上記二つの戦略を日本の翻訳に応用するために、それぞれの戦略の典型的な例として、Oscar Wilde の二作品 *The Importance of Being Earnest* と *Salome* の日本語訳を例に取る。

翻訳戦略を論じるに当たり、対象を英文学作品に限定するのは次のような観点による。翻訳戦略が重要となるのは、様々なジャンルの翻訳の中でも、特に文学作品の場合であろう。文学テキストの場合、翻訳者の解釈が翻訳テキストに介入することになるが、翻訳戦略もその解釈によって決定されることになる。そのため、他のジャンルの翻訳よりも文学テキストの場合に、戦略が重要な役割を果たすはずである。また、文学作品の中でも、様々な言語間・文化間の翻訳を考慮しなければ十分とはいえないかもしれない。しかし、前述したように英語から日本語への翻訳は極めて積極的になされており、英文学の日本語訳の問題が翻訳全般の問題の模範的な例を示すと考えられる。

考察の手順として、まず *foreignization* と *domestication* という戦略について概観する。この二つの対立概念は、英米を基盤として論じられてきた概念ではあるが、実は日本の翻訳論には通ずるところがある。次に二作品の日本語訳の考察から、翻訳に現れる両者の戦略の立場を明らかにする。この分析に基づいて、両者の翻訳戦略が日本においてどのように機能しているか明らかにすると共に、日本で中心とされてきた翻訳観を脱中心化する必要性について考察していく。また、*translation studies* は、現状では日本をはじめとする非西欧の状況を研究対象にすることは多くない。このような欧米に基盤を置く研究分野を日本の場合に応用してどのようなことが言えるのか、欧米の *translation studies* の観点との比較によって、部分的にはあるが検証を試みたい。

本研究は、20世紀後半から欧米を中心に発展してきた *translation studies* を土台にするが、これには二つの理由がある。一つは、上述したように、現在までの日本において、翻訳を学問的な研究対象として論じる姿勢が見られなかったということである。これまでの日本の翻訳論のほとんどは、翻訳の困難さや理想像に関して示唆に富むものが数多くありながら、主として実践論・経験論に基づくものであり、残念ながら理論的枠組みが呈示されることはなかった。また、そのような背景からか、これまで *translation studies* を研究として輸入し受容することにも積極的ではなく、翻訳を研究対象と見る視点が根付いていない。*Translation studies* では、表層への忠実さという概念から脱却し、テキストの文化による変容といった問題に焦点を置く視点が目立つ。しかし、日本の翻訳をめぐる論議にはそのような視点が形成されずにいる。そのため、翻訳を研究対象とするならば、その視点の基礎を築いた *translation studies* の枠組みを導入する必要があると考えられる。

もう一つの理由は、*translation studies* が以下の三点の立場にあることである。第一に、*translation*

studies も現在の日本のような、翻訳を独立した研究対象と考えない状況から出発し、研究の枠組みを作り上げたということ。第二に、翻訳を良訳／悪訳という規範的な判断に基づくのではなく、記述的に分析することで、個々の翻訳に何が起きているかを問題視する視点を新たに提供したということ。第三に、日本の翻訳観に多く見られるような、論者個々の主観に基づく印象批評的な視点による翻訳観からの脱却を図ったということ、である。この三点から、translation studies は欧米の言語間相互の翻訳を主たる研究対象にしてはいるが、欧米の言語から日本語への翻訳に関しても、これまでにはあまり見られなかった新たな視点を導入することが可能であると考えられる。

具体的な分析方法として、Gideon Toury が主張する記述的 translation studies の立場を踏襲したい。<sup>4</sup> Toury は、翻訳はこうあるべきという規範的な立場からの分析ではなく、あくまでテキストを記述的に分析し、なおかつ目標文化の体制や制度にテキストを位置づけるという記述的研究の必要性を主張している。本稿でも、日本における文学の翻訳に対する態度に翻訳テキストのストラテジーを関連させて論じ、foreignization と domestication というストラテジーがどのような機能を果たしているのかを検証したい。

このような理由から、translation studies に依拠して考察を進めるが、上述の通り日本で研究として根づいていないため、用語の翻訳がまだ確立していない。そのため、本稿では便宜上、訳語が既にあるものは日本語で表記するが、それ以外は英語表記のままとする。

## 2. 翻訳ストラテジー

まず、翻訳ストラテジーとは何かを定義しなければならない。翻訳という行為には、特定のテキストを翻訳するという意図と、どのような翻訳テキストを生成するかという姿勢が必ず伴う。この意図と姿勢には、原文をどう捉え、それを翻訳にどう反映させていくか、という翻訳者の立場や態度が示されているはずである。このような翻訳に伴う翻訳者の意図や姿勢を翻訳ストラテジーとする。

*Routledge Encyclopedia of Translation Studies* によると、翻訳ストラテジーは翻訳するテキストの選択と、実際に翻訳する方法の両方と関連する。このストラテジーは、文化的、経済的、政治的な多様な要因によって生じるが、大別すると foreignization と domestication の二つに分類することができる。<sup>5</sup>

前者は外国文学を外国のものとして訳す、つまり source culture (起点文化<sup>6</sup>) の異文化的特質を翻訳の中にも保持するためのストラテジーであり、後者はその逆で、原文の異文化的特質を target culture (目標文化<sup>7</sup>) に即した形に馴化させようとするストラテジーのことである。<sup>8</sup> この二つの対立概念は、近年特に Lawrence Venuti によって頻繁に論じられている。<sup>9</sup> 彼の論考によれば、英語が世界的に見て特権的な地位を得ているために、あらゆる外国文化から輸入されたテキストを domestication のストラテジーによって「わかりやすく」「流暢な言葉で」翻訳することが、米国における翻訳の規範となっている。Venuti はこの状況を批判的に捉え、foreignization を domestication と対立するストラテジーとして肯定的に用いている。Venuti は米国の状況から論じているわけだが、興味深いことに、外国のテキストをどう翻訳するかに関して、この対立概念は日本における伝統的な翻訳観と重なる部分がある。

日本における翻訳論は、大別するとこれまで三つの視点から論じられてきた。第一は、原文を忠実に翻訳するために重要なのは一字一句の表記を疎かにしないという姿勢か、もしくは原文の精神を汲み取るために内容伝達を重視する姿勢か、という逐語訳か自由訳かをめぐる二項対立である。この対立は、西洋語と日本語の差異の大きさに直面した明治大正期の翻訳者達によって主に論じられたが、<sup>10</sup> 概して、現在に至ってもその二項対立的な議論が続けられている。

第二に、翻訳は可能か不可能かという議論がある。これは明治大正以降、膨大な翻訳が既に日本に氾濫した後、本当に忠実に翻訳がなされているかという疑問から生じた議論であり、外国文学に精通する研究者や翻訳者によって盛んに論じられた。<sup>11</sup> 翻訳を不可能とする側は、文化が違う以上原文を忠実に翻訳することはできないという立場に立ち、その反対の立場は、翻訳の目的は原文の忠実な再生ではなく、芸術的作品を創造することであって、可能や不可能という問題ではないと考える。

第三に、日本文化が欧米を知るために、欧米のテキストの異文化性を強調して訳すか、日本文化に即した形で受容するような翻訳を目指すか、という対立がある。<sup>12</sup> これは translation studies の概念で言えば *foreignization* と *domestication* の二項対立に相当する。この対立概念は、日本の翻訳を論じる上記二つの視点と密接に関わる。つまり、逐語訳か自由訳かという対立概念と呼応し、また、外国文学を起点文化で読まれているテキストと全く等価に忠実に訳すことが可能かどうかという議論を引き起こすという点で、翻訳は可能か不可能かという議論にもつながっていく。

このように、*foreignization* と *domestication* という対立概念は、日本の状況にも応用できる。以下に、この対立するストラテジーによる翻訳論を概観すると共に、Wilde の作品の翻訳を例に、このストラテジーが翻訳としてどのような機能を果たしているかを分析する。

## 2. 1. Foreignization

*Domestication* のストラテジーを規範化する米国の翻訳をめぐる状況に対して Venuti が批判的であることは先に述べた。彼は、異文化のテキストを自国文化に馴化させることなく、異文化として受容することこそが翻訳の倫理であると捉え、*foreignization* のストラテジーを支持している。<sup>13</sup>

このような Venuti の立場は、Friedrich Schleiermacher による翻訳の二分類に由来する。Schleiermacher は翻訳を「読者をテキストに近づける翻訳」と「テキストを読者に近づける翻訳」に区別しているが、<sup>14</sup> 彼は、翻訳テキストはあくまで外国文化で生まれた外国語のテキストであることを目標文化の読者に提示すべきであると考え、前者の翻訳を支持した。この Schleiermacher の主張は、異文化で書かれたテキストという事実を読者から隠してしまう *domestication* のストラテジーを批判し *foreignization* を支持する Venuti の論に踏襲されている。*Foreignization* というストラテジーは、異文化をそのまま理解させる翻訳によって目標文化を異化することを重要視していると考えられる。

では、日本の翻訳論において、*foreignization* と捉えることのできる立場とはどのようなものだったのだろうか。日本は明治維新以降、西欧文化の受容を日本の近代化の命題とし、西欧文化は日本が目指すべき優れたものであるが故に、これを日本は無条件に受容すべきものと見なす姿勢があったことは否めない。翻訳を中心とする文学受容においても、「日本よりも優れた、進んだ」西洋文学を忠実に理解することが重要とされ続けてきた。

翻訳と外国文学受容に対して上記のような姿勢を反映している一例として、野上豊一郎の翻訳論がある。野上にとって外国文学—特に英文学—を読むということは、西洋と同じ土俵に立つための手助けであり、日本の価値観で咀嚼して理解を容易にするのではなく、あくまで原文のまま受容することでなければならない。日本は明治維新まで世界を知らず、世界の文学を読み知ることができなかったが、昭和の時代に入り「世界の文学を世界人と共に読み、感じ、考えることができている<sup>15</sup>」のだから、外国語のテキストをそのまま読むことができるよう、「表現の移し替えに於いて解説者的もしくは注釈者的態度を執ってはならない<sup>16</sup>」というのが野上の論理である。従って、翻訳も「原作の一字一句の心持ちまでも失はないようにする<sup>17</sup>」、つまり、原作者が用いた言語表記を尊重すべきと述べる。

この視点は中国文学研究者である吉川幸次郎の翻訳観にも共通する。吉川は「外国文学研究の正道は、あくまでも原語についてなされるものでなければなりません。(中略) 原文のもつだけの観念を、より多からずまた少なからず伝える方が、童蒙にはむしろ便利でありますまいか。日本の読者に対する過度の関心は、却って日本の学問の能力をそこなうおそれなきに非ずと考えます<sup>18)</sup>」と、原文に忠実な翻訳を肯定している。吉川にとって外国文学を読むとは、外国文学の研究、「言語を資料とする人間学」であるので「原文を本当の意味で」読むべきであり、そのためには「外国のその民俗全般を知」らなければならない。従って、翻訳とは「二つの民族の言語という矛盾した存在の中に、統一した方向を見出そうとする努力」であり、それ故に原文はあくまでそのまま日本人読者に伝え、読者がわかりやすいように原文を操作することは慎むべきだとする。<sup>19)</sup>

それまで手本としていた西洋文化と同じ土俵に立つことを目的とする野上の視点や、外国文化をそのまま受け入れ、自国文化との差異を認識することから原著者への統一した普遍的な理解を目指すという吉川の視点は、目的に違いはあるにせよ、外国文学をいったんは起点文化での存在と同じように理解することを外国文学受容の前提にしている点で共通している。そして、翻訳はその延長であり、起点文化における原文と同じものを日本人読者にも与えるべきという翻訳観につながっている。

以上のような原文重視の日本の翻訳観は、日本にはない新しい言葉や思考によって日本語や日本文化を豊かにすることに翻訳の意義を求めるという考えと言い換えても良い。異文化・異言語であることの保持を最優先にし、原文の言語や思考を既存の日本語の中に求めるべきではないとする姿勢が、原文を忠実にそのまま受容することを求める姿勢につながっている。このような野上や吉川に見られる立場は、原文の異文化性特質を保持するという点で、Schleiermacher や Venuti が述べている *foreignization* の考えと立場を同じくするものである。このような翻訳観は、対抗概念や対立する姿勢を持ちつつも、現在まで日本において優勢な翻訳観、または翻訳規範であったと言える。

以下に、*foreignization* のストラテジーの日本における典型的な例として、Oscar Wilde の風習喜劇 *The Importance of Being Earnest* の日本語訳『まじめが肝心』(西村孝次訳) を取り上げ、この翻訳が日本においてどのように機能しているかを考察する。

## 2. 2 Foreignization を示す翻訳例—『まじめが肝心』

この作品は 1895 年に初演されて以来、現在に至るまで英国では多くの劇団・劇場のレパートリーになっており、初演から百年以上が経過してもなお、英文学のキャノンとして位置づけられている。<sup>20)</sup> しかしながら、山田勝によれば *The Importance of Being Earnest* の上演は日本でこれまで三度のみであり、日本語訳も現在までに全集を除けば三種類が出版されているのみである。<sup>21)</sup> 日本での受容は決して起点文化で受けたような高い評価とどう同様のものとはなっていない。

この理由として、まず喜劇、特に風習喜劇の場合、その背景となる社会や文化に深く通じていなければ、背後にある含意が理解できないという点が当然のことながら考えられる。また、日本文学の伝統の中に、一部の例外を除き、欧米ほど風刺をテーマとする喜劇というジャンルが浸透していない以上、喜劇をキャノンとする下地が出来ていないということもできる。しかし、作品評価の差異を文化や文学システムの違いに帰結させてしまうのでは、異文化は翻訳できないという翻訳不可能性の議論に陥ってしまう。重要なのは、その文化の差異に翻訳者がどのような翻訳ストラテジーによって対処を試み、そのストラテジーがどのように機能しているのかという点である。本稿は、喜劇の翻訳というジャンルにまつわる特異性を問題とするのではなく、翻訳テキストに現れているストラテジーについて考察したい。

*The Importance of Being Earnest* は現在三種類の日本語訳が入手できるが、本稿では、その中から現在一般の読者にも入手しやすいと考えられる、新潮文庫収録の西村孝次氏による日本語訳『まじめが肝心』(1973)を中心に考察する。西村氏は個人全訳によるワイルド全集を出版するなど、Wilde の研究者として優れた業績を残しており、『まじめが肝心』は *The Importance of Being Earnest* の最も信頼のおける翻訳と考えられる。

まず、翻訳テキストとの比較のために、原文テキストの特徴を概観する。第一の特徴は、階級をめぐる当時の世相への風刺である。英国の階級社会は上流、中流、労働者階級の区別が明確であるが、19世紀後半になると上層中流階級が豊富な資金力で上流階級の下層である紳士階級と経済的に遜色ない地位へと向上した。<sup>22</sup> このような中流階級との経済格差縮小の一方で、伝統と名誉を盾に中流との差異化を図りたいという上流階級の葛藤が生まれる。その一例が *respectability* という当時を代表する価値観をめぐる態度である。元来中流階級の道徳的な指針であった *respectability* (尊敬に値すること、立派であること) は、ヴィクトリア女王がこれを実践する生活信条を示したことから、上流階級が無視できなくなったものである。しかしそれは上流階級にとっては、内面ではなく外見だけは他人から「立派」に見えることを追求するという姿勢であった。つまり、*respectability* は中流階級の価値観であり、上流階級にとっては見下す対象であったにもかかわらず、<sup>23</sup> 外見的な *respectability* だけは維持しなければならないという葛藤が生じてくる。Wilde は、*The Importance of Being Earnest* の中でこのような葛藤を強烈に風刺している。

第二の特徴は、Wilde の芸術観と当時の英国社会における彼の立場の反映である。この作品以前に発表された三喜劇もそれぞれ大成功を収めており、Wilde のスタイルは世間によく知られ、良きにつけ悪きにつけ時代の注目を浴びていた。彼の芸術観は、*respectability* に代表されるような表面上ではあっても道徳を重視する当時の価値観とは真っ向から対立するものである。そのため Wilde の作品や言動への強い批判、あるいは揶揄も多かったが、彼はそのような世評を逆手にとり、自分の芸術観を批判する世相を風刺するというユーモアをこの作品中で発揮しているのである。

第三の特徴は、世間への風刺と著者の芸術観という上記の特徴を言葉遊びによって技巧的に表現している点である。例えば、Jack が後見する Cecily を Lady Bracknell に認めさせようとする台詞がこの特徴をよく表している。

Jack: I have also [...], you will be pleased to hear, certificates of Miss Cardew [Cecily]'s birth, baptism, whooping cough, registration, vaccination, confirmation, and the measles: both the German and the English variety. (p. 80)

ジャック：ご満足いただけるでしょうが、僕は・・・カーデュー嬢の証明書も持っています。出生、洗礼、百日咳に登記、ワクチン接種に堅信札、はしかだって。ドイツのもイギリスのもお見せできます。(拙訳)

ここでは、'German'という言葉が注目に値する。ドイツが当時人気の高かったヴィクトリア女王の夫アルバート公の出身地であること、当時の産業国としての発展が英国人にとって称賛に値したことから、German という言葉は読者にとって *respectability* のイメージを喚起した。Cecily を認めさせるため、はしかやワクチン接種の言及にまでこの言葉を用いて *respectability* を主張することに、*respectability* をありがたがる当時の風潮への皮肉が読みとれる。さらに、この台詞以前に、French と German とが頻繁に言及され、前者を好ましくないもの、後者を好ましいものとし

て対比されているため、German という言葉から読者はこの対比を想起するはずである。さらに、Wilde が Huysmans ら象徴的・審美的なフランスの芸術を称賛していること、フランス語で執筆された *Salome* が退廃的、病的と酷評され、<sup>24</sup> 英国での舞台化を禁止されたことは当時の読者や観客には周知のことであった。ここにも Wilde の退廃的な芸術観が、それを批判する世間を逆手に取る形で、堂々と描かれている。そして、このような世相や自身の芸術を批判する世間への風刺が、'German measles' (三日ばしか) と「証明書を英語とドイツ語の両方で」という意味の掛詞である 'German' の言葉遊びによって表現されているのである。

この第三の特徴に示されているように、世相をめぐる階級意識への風刺と Wilde の芸術観に関する世間の評価への揶揄が、多層な意味合いを構成する掛詞や言葉遊びによって描かれているところにこの作品が英国で高い評価を得る要因があると考えられる。

次に、西村訳の特徴について考察する。まず大きな特徴は、西村訳の日本語が原文テキストに極めて忠実であり、一字一句まで丁寧に訳されている点である。その際に問題となるのが、文化・社会背景の異なる日本人読者には、原文テキスト中の固有名詞や文化の情報が理解できないということだろう。この問題を解決する方法が、西村訳のもう一つの特徴である、訳注の多用である。

西村訳の訳注は総数で 114 カ所あるが、これは内容から i) 固有名詞の解説、ii) 文化的事象の説明、iii) 言葉遊び、ことわざのパロディなどの説明、iv) 社会・文化的なコンテキストに関わる皮肉・逆説の説明、の 4 種類に分類することが可能である。i) は特に地名や食べ物などの固有名詞の説明、また「エーカー」などの単位の換算もこの類に含めた。23 カ所の訳注が該当する。ii) は日本の文化には存在しない英国独自の社会事象、文化的な事柄や風習の説明である。例えば、「フラット」の説明（事物の単純説明）、そのフラットに「電鈴」があるのが「いかにモダンであるかをほのめかす<sup>25</sup>」という説明（文化的意味合い）、または聖書やギリシャ神話からの引用についての解説（文化背景）、洗礼の説明（風習）などがこの類の訳注に含まれる。52 カ所の訳注がこれに該当する。i) と ii) はその性質として共通する部分が大きく、両者の性質を持つと考えられるものも 4 カ所ある。iii) の言葉遊び・パロディなどの説明は 16 カ所あり、語が掛詞になっていること、洒落の元になっている諺や慣用表現の説明が主である。iv) の皮肉・逆説の解説は 11 カ所あり、主として台詞や行動の含意の補足説明や逆説の指摘にとどまっている。iii) と iv) 両者に該当すると考えられるものが 5 カ所、ii) と iii) 両方、ii) と iv) 両方に該当すると考えられるものがそれぞれ 2 カ所ある。

表層を忠実に訳す場合、日本人読者にとって具体的な文化的事象や風習は未知であるため、表層の意味理解のために不可欠な情報を提供せずにはテキストとしては機能しない。訳注の 3 分の 2 以上を i)、ii) の文化的事象の説明に当てているのは、このためと考えられる。iii)、iv) の訳注についても、基本的には表層の意味の補足説明にとどまっている。

このように原文表層と等価な訳を試み、表層理解のための補足以外に訳注を付さないということは、背後に持つ含意を日本人読者が共有できなくても、起点文化の読者に対するのと同じテキストを日本人読者がそのままの形で受容することが可能であるという前提に立ち、そのような受容を読者に要求していると考えられる。これは、Eugene Nida の言葉を借りれば、formal equivalence (形式的等価) として説明できる。<sup>26</sup>

形式的等価は、形式と内容の両方の点で、メッセージ自体に注意を払う。・・・受容者の言語になったメッセージが、起点言語での異なる要素と、可能な限り同一になるべきと考えられている。<sup>27</sup>

この具体的な例は、前節で例示した、'German' という言葉によって respectability や Wilde の芸



術観を含意する台詞の西村訳であろう。

「・・・お喜びいただけるでしょうが、ミス・カーデューの出生、洗礼、百日咳、登記、種痘、堅信札、および、はしかの証明書も所有しています。ドイツ語のと英語のと二種類あります。」

(『まじめが肝心』 p.258)

この訳文には、「ドイツ」という言葉や *respectability*、ワイルドの芸術をめぐるコンテクストを含む「フランス」と「ドイツ」という言葉との対比、そして *German measles* とドイツ語の証明書という言葉遊び等、日本人が容易に理解できない起点文化の背景や言葉遊びに関しては訳注が付されていない。一方、原文の一字一句については極めて忠実に訳されており、上述したとおり、日本文化と異なる英国の、それも 19 世紀末上流階級の世相をそのままの形で、形式・内容共に、日本人読者に受容させるという意図の現れと言えるのではないだろうか。

以上のように、『まじめが肝心』は、起点文化のコンテクストを日本人が理解できるように積極的に解説するのではなく、あくまで外国文化を外国のものとしてテキストに保持し、日本人読者に与えるというストラテジーを採っている。このストラテジーは前節で言及した *foreignization* と呼べるものである。このような「原文の表層に忠実」で「原文に書かれたままを理解することを求める」翻訳ストラテジーは、原文や起点文化の特質をそのまま保持した上で目標文化の読者にテキストを提示するという、野上や吉川の翻訳観・外国文学受容観を具体化しており、日本における英文学と翻訳の主要な傾向を反映していると考えられる。『まじめが肝心』の出版年は 1973 年であり、野上や吉川の翻訳論からは半世紀近くを経ているにもかかわらず、外国文学を異文化として忠実に受容しなければならないという翻訳観・外国文学観が依然として支配的だと言えることができる。

しかし、このようなストラテジーを持つ翻訳は、少なくとも『まじめが肝心』の場合は必ずしも機能していない。上述の例で見れば、原文を忠実に訳しても *Cecily* の出自という大きな問題に子供の病気の証明書という些細な事柄を組み合わせるユーモアは理解できるものの、作品の特徴である 19 世紀末英国独自の世相・階級意識や *Wilde* の芸術観をめぐる風刺について、日本人読者の理解は及ばない。この作品の顕著な特徴であり、起点文化で高い評価を得る要因となっていたと考えられるのは、言葉遊びや世相への風刺・皮肉であることは既に述べた。表層に忠実な翻訳は、このような深層にある言葉の意味の多様性、文化背景の含意・皮肉に対する日本人読者の理解への道を閉ざしてしまっている。

『まじめが肝心』は、西村氏自身が訳書の解説で言及しているように、<sup>28</sup> *The Importance of Being Earnest* の完成度の高さを十分理解した上で、原文の文章を過不足なく、非常に忠実に日本語に訳出している。目標文化の読者にその研究成果を提供しているという意味で大きな業績であることは間違いない。しかし、残念ながら、上記の例から窺い知れるように、*The Importance of Being Earnest* のように起点文化での文化コンテクストに規定されるテキストの場合、原文をそのまま等価に翻訳しようとする翻訳ストラテジーでは他文化の読者には機能しない場合がある。西村訳のストラテジーは、原文そのままを保持しようとするが故に、この作品の喜劇としてのおもしろさや完成度の高さを日本人読者に伝えることが出来ないという結果に陥ってしまっている。*The Importance of Being Earnest* が英文学のキャンオンとして日本で積極的に受容されないのは、作品の背景にある独自の文化や、それを異文化が好むかどうかという問題はさておき、外国文学において *foreignization* を重視する伝統を踏襲する西村訳のストラテジーに大きな要因があると言えるのではなかろうか。

## 2. 3 Domestication

Venutiによれば、原文を目標文化に馴化させるような domestication の戦略においては、起点文化から目標文化への作品のコミュニケーションは、「目標言語の文化に先導、統制されており、利害を持つ解釈、つまり、情報の伝達ではなく、外国のテキストを自国の意向に即してしまうものになってしまう」。<sup>29</sup> Venuti はこれをあらゆる翻訳に内在する「自民族中心的な暴力行為 (ethnocentric violence)」を助長するものだと考え、翻訳の倫理として、domestication の戦略はできるだけ控えるべきであるという立場をとっている。Venuti のような domestication の戦略批判によれば、この戦略は目標文化が起点文化と対峙し、文化変容—あるいは異化—する機会を失わせるという結果になってしまう。欧米の translation studies の場合、domestication と foreignization が全く正反対の対立概念として位置づけられ、foreignization を尊重する姿勢が domestication を明確に批判する姿勢と同一になっている。

しかし、日本においては、前節までで述べた野上や吉川の翻訳論や、それに基づいた西村訳のような foreignization を志向する立場がある一方、日本人の理解や、日本文化・文学を背景とした日本人翻訳者の独創性を尊重する翻訳観・外国文学受容観もある。例えば、大山定一は、既述の吉川との書簡において、吉川と正反対の翻訳観を披露している。<sup>30</sup> 大山は翻訳の創造性と芸術的価値を認め、翻訳と外国文学受容が目標文化の中でより広義の文学として捉えられるべきだと主張する。前述したように、吉川の論は、異文化で生まれた異言語のテキストだということが示さる翻訳を支持するものだった。大山はそれとは異なり、積極的に目標文化の価値観を翻訳テキストに反映させることを推奨している。

この大山のような立場の翻訳観は、翻訳という原文のメタテキストが新たな芸術性を持つ可能性を重視してはいるが、決して異文化を意図的に自国文化に馴化させようとするものではない。しかしながら、この翻訳観は日本文化に即す形の翻訳テキスト生成を支持しているという点で、foreignization の対極にある domestication の立場と考えられる。次に、domestication の戦略を採用していると考えられる顕著なテキスト例として、日夏耿之介訳『サロメ』を例に実例を考察する。

## 2. 4 Domestication を示す作品例—『サロメ』

*Salome* は起点文化と目標文化における作品評価において、*The Importance of Being Earnest* と対称をなす作品である。後者が起点文化においてキャノンとして高い評価を受けている一方、前者は 19 世紀末の特異な芸術性の代表としての評価が一般的である。しかし日本では、Wilde の受容はまず *Salome* に始まり、明治大正期以降の近代文学に大きな影響を与えた。翻訳の数も現在までに森鷗外をはじめ、現在入手できる四編を含めて過去 20 編以上の日本語訳が出版され、<sup>31</sup> 上演も数多い。<sup>32</sup>

これまでに出版された *Salome* の日本語訳の中で、詩人でもあり翻訳家でもある日夏耿之介の手によるものは 1928 年から 1977 年までに三種類の翻訳が六度出版されている。<sup>33</sup> 彼の翻訳は三島由紀夫が高く評価し、<sup>34</sup> 自らの演出台本にも用いている。以上のような要素は、日本での *Salome* の受容を考える上で注目に値すると考えられる。これは、詩人としての日夏の芸術的才能が翻訳に現れていることも一因だと言ったことができるかもしれない。しかし、彼の才能と彼が実際の翻訳行為に採用する翻訳の戦略とは別の問題であり、芸術的完成度はその戦略のもとに達成されるものである。従って、本稿では、日夏の翻訳戦略こそが問題にされる

べきであるという視点で論じていく。

この作品が起点文化である英国よりも、むしろ日本において好意的に受容されたのは、何よりもまず、日本人読者の文化背景を要因として考えることができる。女性の情欲を芸術的モチーフとして見ること、現実と非現実を完全に区別して作品世界を捉えること、善／悪のような確固とした二項対立価値観を作品に投影しないこと、といった日本人特有の読み方が考えられる。<sup>35</sup> また、悲劇というジャンルが歌舞伎をはじめとする日本文化に深く根付いており、日本人読者が受け入れやすい素地があったということも言えるだろう。しかし、先に述べたように、文化的特質に帰結させるのではなく、翻訳のストラテジーがどのような機能を果たしているのかを論じることが本稿の目的であり、ここでは文化の嗜好やジャンルの問題としてではなく、あくまで翻訳テクニクの観点から論じていく。

まず原文の特徴を概観する。*Salome* は題材を新約聖書に取り、非ヨーロッパの Judea を舞台に、王女サロメが預言者ヨハネを欲望のために殺すという異教的世界を描き出している。また、聖書の記述やソロモンの雅歌の文体模倣は擬古的な印象を喚起している。<sup>36</sup> このオリエンタリズムと擬古趣味の両者が *Salome* の特徴と考えられる。<sup>37</sup> 当時のヨーロッパ世界にとって、非ヨーロッパ世界は Said が述べたようにヨーロッパ価値観の投影であった。<sup>38</sup> 言い換えれば、非ヨーロッパ世界は彼らにとって、文明的な思考体系とは異なる「未知」で「異質」な世界を、自らの想像力の及ぶ範囲で映し出す鏡であった。

*The Importance of Being Earnest* が、当時の社会や風習、著者自身の芸術観を英語の言葉遊びに絡ませるといふ、起点文化・起点言語に依存する内容であったのと同様、*Salome* もヨーロッパ独自のオリエンタリズムと聖書の文体という起点文化や起点言語によって作品の性質が大きく左右されている作品であると言えるだろう。

次に、日本語訳について考察する。日夏耿之介による『サロメ』日本語訳の翻訳ストラテジーは、西村のものとは大きく異なっている。最も興味深いのは、日夏が自身の *Salome* 訳『院曲撒羅米<sup>39</sup>』に、八項目にわたる「上演の際に註すべき國譯者の注意」を付していることである。この「國譯者の注意」は、上演する際の衣装や大道具への言及一項目を除き、すべて日夏の作品解釈を示している。ここで読者には翻訳が原文の一解釈の投影であることが明示されている。例えば、次の項目が顕著な例だろう。

公主及び國王の曇み込みの長セリフは、この形式文學の主調たるを以て、努めて現實劇風の型を避けて、むしろ能の對話さまの如き超現實性に起ちて、その餘は優人の近代的創意に俟つべきものとす。

院曲撒羅米は orientalism の文學也。orientalism は歐人三百年の夢にして、極東の我等は、歐人の夢裡に入りたるこの近東的迷景を味わひて、二重の exoticism を感受す。（日夏耿之介全集 pp.543-544）

以上の注からは、「能の如き超現實性」「二重の exoticism」という言葉に含意されているように、日夏が日本文化を背景とする作品解釈のもとでこの作品を翻訳していることが窺われる。具体例として、サロメがヨカナーンに口づけしたいと願う場面の訳文を挙げる。

[・・・]約翰よ、わが身が覺めてゐるのはそなたの唇ぢや。その唇は象牙の塔の上にある猩々緋の紐のやうぢや。象牙の小刀で二つに切つた柘榴の實のやうぢや。[・・・]その唇

は酒樽さかづねのなかで葡萄ぶどうを踐ふんでゐる造酒師とらうじの足よりも絳あかい。聖院みでらに巢くうをくうては上人あかさまだち  
に餌えを飼かわれてゐる鴿はとの足よりも絳あかい。森林もりの中から獅子ししを殺ころし、金色こんじきの大蟲とらを見て現  
はれ出た男子をとこの足よりも絳あかい。大海わたつみの幽暗うすらあかりのなかより目附すなどりけ出だして、漁人あかが王者かなやまの貢  
物とする朱珊瑚しんしやの枝あかのやうに絳あかい！・・・摩押人モアブびとが摩押モアブの鑛山かなやまより掘り出して國君あかにささ  
げる辰砂しんしやのやうに絳あかい。辰砂しんしやで彩あかつて朱珊瑚しんしやの金頭かながしらを附あかけた波斯王ペルシヤわうの弓あかのやうに絳  
い。・・・世くちの中にその脣あかのやうに絳あかいものとはない。・・・そなたの脣くちに接吻くちつけさせて  
おくれ。

(日夏耿之介全集『サロメ』p.522)

異国の事柄を次々に描写してオリエンタルな美を連綿と描き出すこの台詞は、ワイルドの唯美主義的思想を具現化していると考えられるが、日夏はこれを日本風に再現している。日夏は「猩々緋」「辰砂」のように中国の事柄を連想させる言葉を用いているが、「猩々緋」とは中国の想像上の動物である猩々の血で染められた色を言う。「辰砂」とは赤の顔料となる硫化水銀のことであり、中国辰州にその名を因んでいる。このような言葉は日本人読者に馴染みはないかもしれないが、「緋」や「辰砂のやうに絳い」という次に続く言葉からは意味が類推されるだけでなく、未知の漢語＝異国的なイメージが喚起される。さらに、Moab, Persian に「摩押」「波斯」と漢字を当て、ヨーロッパにとってのオリエンタリズムだけではなく、日本人が中国との連想で感じる異国的なイメージを醸し出す。また、「絳い」「大蟲」のような表現を用い、日本人が知っている言葉でありながら異質なイメージを想像させる。日夏は漢字や中国を連想させる言葉を用いることで、日本人が感受できるエキゾティシズムを表現していると考えられる。エキゾティシズムだけではなく、古い言葉（「そなた」「巢をくう」「～とて」など）や旧仮名遣い（「～やうぢや」「～ゐる」など）は、原文の特徴であった擬古体の英文を日本語として再現しており、全体として原文同様の擬古調を作品世界に創り出している。

単にヨーロッパが中東に対して持つオリエンタリズムを感受するだけでなく、日本語という媒体を通して得られるエキゾティシズムの感覚を日夏は重視していると考えられる。つまり、彼の言う「二重の exoticism」とは、原文に描かれるオリエンタリズムを感受しつつ、日本人が独自の形で異国趣味として味わうという意味で二重であると言えるだろう。

このように、日夏のサロメ訳は、原文やその背景をそのままの形で日本人読者に理解させようとする西村訳とは大きく異なり、ただ原文を理解するだけでなく、その本質を日本人が共感できる形で示すという、domestication の戦略を採用している。この戦略によって、Salome という作品が日本人独自の読みを背景として、原文に従属するのではなく、目標文化で全く別物にもならず、原文に対する新しいメタテキストの再構成として創り出されると考えられる。少なくとも Salome の場合、以上のような domestication の戦略がうまく機能していると言えることができる。このような日夏の翻訳が再録を含めて六度も出版されていることや、三島由紀夫演出の舞台を含め 1960, 1971, 1980 年と日夏訳の台本が上演されたという事実から見ても、このことは明らかである。読者や観客は、このような新しいメタテキストの再構成を積極的に享受してきたと言えるだろう。

### 3. 翻訳と外国文学テキスト受容の可能性

前章の考察から、次の点を指摘することができる。日本における原文至上主義とも言える外国文学研究の伝統が foreignization の戦略を採用させ、これにより翻訳は原文に従属した存在に留められているのではなかろうか。西欧の文学を受容し始めて僅か 150 年足らずの間に、積

極的に西欧文学を受け入れ、翻訳で紹介を続けてきた外国文学研究の業績は計り知れない。そして、西村訳がその業績の一つであることは疑いがない。ただ、英文学を無条件に優れているもの、原文のまま受容しなければならないものとする研究姿勢が、制度的な英文学研究を形成してきた点は否めないのではないか。その制度が導く *foreignization* の翻訳戦略は、本論文の2章2節で述べたように、残念ながら十分に読者に機能しているとは言い難い。むしろ、目標文化独自の解釈を明示する *domestication* の戦略の方が、テキストの積極的な受容を誘発する可能性もあるのである。言い換えれば、*foreignization* を支持する翻訳論が求める目標文化の異化が、日本の翻訳をめぐる状況においては、必ずしも常に達成されるわけではないことが示されているのではないだろうか。

では、なぜ欧米の *foreignization* 支持の翻訳観は、日本の場合に機能しないのだろうか。Venuti による *foreignization* の主張の背景には、英語や欧米文化というヘゲモニックな立場と、マイノリティや他文化・他言語を自身のヘゲモニーに組み込み、従属させてきたという歴史がある。Venuti にとっては、*foreignization* の戦略によって目標文化を異化することが、この歴史的背景に対する打開策であったと言えることができるだろう。

その一方、日本においては、Venuti が問題視している自国のヘゲモニーと翻訳の問題とは状況が異なっている。日本は、前述した制度的な英文学研究に象徴されるように、欧米文化をそのまま理解すべきといういわば欧米文化による侵食を受けているのである。そのような状況では、日本は外国のテキストをそのまま受容すべきという *foreignization* の戦略に基づく翻訳観が支配的になることは当然であろう。しかし、Venuti が自国のヘゲモニーに他文化を組み込むような翻訳を問題視するなら、欧米文化のヘゲモニーに追従し、*foreignization* を絶対視する日本の翻訳観も問題視されるべきである。

西洋文学を闇雲に受容していた明治初期には、まだ *foreignization* は絶対視されておらず、究極の *domestication* である翻案によって原文テキストを目標文化の読者に合わせる形で取り入れていた。当時は日本人読者に顧慮しても尚、テキストの内容や思想が、未知で新しい異文化のものとして容易に受け入れられた。つまり、異文化と対面させ、自文化を異化することができたのである。しかし、その反動として逐語訳を求める態度が生まれ、それによって近代の日本語が異化された。その後も常に異文化との隔たりを知り、既存のものが異化されることで近代文学が形成されてきたことは、亀井俊介に指摘されている。<sup>40</sup> しかし残念なことに、目標文化の読者の文化背景を考慮せず、異文化をそのまま理解させようとする *foreignization* 戦略は、西洋文化に異化されるだけの近代を経験した日本文化の読者にとっては必ずしも機能しないと言わざるを得ない。

では、日本の場合、翻訳の意義は何に求めることが可能だろうか。ここで Venuti が翻訳の本質として指摘している「脱中心化」の必要性を見てみたい。翻訳戦略の問題について、Venuti は、学术研究のような制度は、既存の翻訳観やキャンオンを承認する「原文と同じ」であることを「翻訳の倫理」とする傾向にあると指摘している。さらに、重要なのは翻訳がそのような自国の慣例となっている価値観を脱中心化し、自国の文化を変えていくことであるとも述べている。<sup>41</sup> 前述したように、欧米が翻訳で異文化に対峙する姿勢と日本のそれとは、ヘゲモニーに組み込む側と組み込まれる側という大きな違いがある。しかし、外国文学研究という制度が「原文と同じ」であることを翻訳に求めるという指摘は日本の翻訳観にもあてはまるであろう。慣例的価値観を脱中心化すべきという視点は、米国とは文化のヘゲモニーをめぐる状況が逆であっても、日本に適応可能と考えられる。つまり、外国文学は優れたものだからそのまま受容すべきとする態度を絶対視せず、制度的・慣例的な外国文学受容に対して異なる態度を示すことが翻訳の役割の一つなのではないか。

このように「脱中心化」を志向する翻訳として、日夏の翻訳ストラテジーが一つのヒントになるのではないだろうか。西村と日夏の翻訳態度の最大の違いは、前者が原文の表層に書かれたままを受容しなければならないという態度、後者が原文に対する一つの解釈であることを明言する態度であるという点にある。前者は翻訳とは原文の異言語での置換再生であるという立場に立ち、その背後に原文そのままの受容を絶対視する制度的視点を持っている。一方後者は目標文化独自の解釈を加えて原文を再構成している。日本の翻訳論が伝統的に支持してきた原文への忠実な姿勢に対し、日夏訳のストラテジーは、原文を目標文化が受容するもう一つの可能性を提示していると考えられる。

この受容の可能性という観点に関わるものとして、翻訳を *rewriting*、*manipulation* という言葉で再定義する視点がある。<sup>42</sup> *Translation studies* において積極的に主張されてきたこの視点は、翻訳を決して原文テキストの付属品ではなく、原文テキストへの一つの反応、一つの解釈の表れであると見なすものである。これは、先に引用した Nida の形式的等価の概念に見られる異言語が等価のメッセージに変換されるという翻訳観を否定するとも考えられる。しかし、翻訳と原文の等価を希求する支配的な姿勢にそれとは別の可能性を示し、テキストの受容の幅を広げた点が、むしろ重要だと考えられる。日夏訳が採用した *domestication* のストラテジーは、*rewriting*、*manipulation* という言葉に示されるような、翻訳によってテキストが広がる可能性を積極的に示している。ここに、英文学研究という制度に組み込まれた日本の翻訳観を脱中心化するヒントがあるのではないだろうか。つまり、西村訳に代表される原文を唯一のテキストとして絶対視する制度的な伝統が、日夏が採用したようなストラテジーによって、脱中心化されうる可能性が示されていると言えるだろう。

結論として、以下のことが考えられる。まず、欧米の *translation studies* で論じられている *foreignization* ストラテジーは、欧米語から日本語への翻訳の場合、必ずしも機能しないということである。欧米文化のヘゲモニーに組み込まれることを制度化してしまった日本語翻訳の場合、Venuti らとは逆の視点から翻訳を見なければならないだろう。

もう一つの結論は、翻訳の脱中心化の機能にこれまで以上に目を向ける必要があるということである。これまでは、原文に即して受容することによって、目標文化を異化することを翻訳の唯一の意義として絶対視してきた部分がある。しかし、翻訳テキストに目標文化独自の新たな受容を語らせることによって、翻訳が原文テキストを異化し、それまでのテキスト受容に新たな可能性の幅を与える点に目を向ける必要があるのではないか。

日本の近代文学にしても、外国文学に異化されただけではなく、外国文学の原文そのものを、いわゆる翻案や自由訳によって、日本の文化に即して異化してきたことも事実である。それが厳密な原文受容を求める西洋文学研究の態度に取って代わられて以降、翻訳はその意義を目標文化の異化に譲ってしまった。明治初期の翻案や自由訳は日本人の異文化受容を容易にするためのツールであった。その後、日本人読者の理解しやすさを顧慮せず、原文のまま受容させるためのツールとして、逐語訳を好む傾向に変化したのは、翻訳の進化とも呼べるかもしれない。外国文学テキストの研究成果を読者に還元したり、異文化をできるだけ忠実に理解したことを示したりするという意味で、大きな業績であることは疑う余地はない。しかし、ここまでは一方向的に外国文学を受容しているだけに過ぎない。

日夏の翻訳が示唆しているのは、一方向的な受容ではなく、彼が「國譯者の注意」に述べている通り、自らの解釈によって原文テキストを再構成して提示するという双方向的な意味でのテキスト異化の可能性である。言い換えれば、外国文学の受容には、起点文化に忠実であれという支配的な観点だけでなく、目標文化独自の読みを積極的に反映する観点もあるのだと言えるだろう。

#### 4. おわりに

Oscar Wilde の二作品 *The Importance of Being Earnest* と *Salome* の翻訳ストラテジーの分析を行ったが、以上のことから結論として次の二点を引き出すことができるだろう。

まず、翻訳ストラテジーについてである。翻訳ストラテジーの考察から、目標文化における翻訳の在り方の選択肢の提示が可能になる。ストラテジーを明らかにすることによって、翻訳者がどのようにテキストを受容するか、言い換えれば、どのように原文テキストに反応しているのかも明らかになるのである。この反応の多様さによって、外国文学受容の幅が決まっていくだろう。この意味で、本稿では *foreignization* と *domestication* に注目したが、翻訳のストラテジーという概念をより重視していく必要があるのではないだろうか。

次に、日本の外国文学受容と翻訳についてである。原文テキストとそれを取り巻くコンテキストをそのまま伝達するという制度的な翻訳ストラテジーは、純粋な外国文学研究の成果、外国文学作品についての情報提供として、有益な翻訳の一つの立場であることも事実である。しかし、『まじめが肝心』が日本で積極的に受容されなかったように、そのストラテジーを絶対視することはテキストが異文化で広がっていく可能性を狭めてしまう場合がある。翻訳が外国文学という枠の中に自らを閉じこめ、作品の本質が日本人に理解できるような広がりが見えないからである。このストラテジーを絶対視せず、原文への一つの反応として明示したならば、テキストの新しい可能性が広がったのかもしれない。

日夏の翻訳ストラテジーは、伝統的な翻訳観を絶対視せず、それを脱中心化したことによって、テキストの多様な読みの可能性を目標文化の読者に開いたと言える。日本の場合のように外国文学受容に翻訳が不可欠ならば、翻訳を単に原文をそのまま理解するための装置にとどめるのではなく、外国文学受容を一層豊かにすることを可能にするツールと考えられないだろうか。目標文化で作品が開かれる媒体になるような翻訳ストラテジーをより広く容認することによって、テキストの可能性は広がると言えるだろう。以上のように、従来外国文学受容や翻訳観といった偉大な功績を脱中心化することによって、新たな視点を提供し続けることに翻訳の存在意義を見出していきたいと考える。

#### 【テキスト】

Abe, Takashi (ed.), *The Importance of Being Earnest* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1974)

Raby, Peter (ed.) *The Importance of Being Earnest and Other Plays* (Oxford: Oxford University Press, 1995)

オスカー・ワイルド／西村孝次 (訳) 『まじめが肝心』(『サロメ・ウィンダミア卿婦人の扇』収録) (新潮社 1953、1973)

オスカー・ワイルド／日夏耿之介 (訳) 『サロメ』(『日夏耿之介全集第2巻 譯詩・翻譯』収録) (河出書房新社 1977)

#### 【参考文献】

新井潤美『階級にとりつかれた人びと』(中央公論新社 2001)

井村君江『サロメの変容』(新樹社 1990)

内村鑑三『外國語之研究』復刻版(南雲堂 1984)

亀井俊介(編)『近代日本の翻訳文化』(中央公論社 1994)

小宮豊隆「發句翻譯の可能性」『文藝春秋』(1933.8) pp. 52-6

佐藤美希「文化による『サロメ』の変容—日本での受容をめぐる—」『北海道英語英文学第48号』2003

pp.23-32

- 澤村寅二郎『翻譯論』(英語英文學講座刊行會 1934)
- 山宮允『譯詩論』(英語英文學講座刊行會 1934)
- 楚人冠「反譯か反逆か」『改造』(1933.9) pp.10-17
- 坪内逍遙『シェークスピア研究栞』(新樹社 1959)
- 長島伸一『世紀末までの大英帝国』(法政大学出版局 1987)
- 野上豊一郎『翻譯論』(岩波書店 1938)
- 二葉亭四迷『二葉亭四迷全集 第五卷』(岩波書店 1938)
- 三島由紀夫『三島由紀夫全集第 29 卷』(新潮社 1975)
- 森田草平『翻譯の理論と實際』(英語英文學講座刊行會 1933)
- 山田勝(編)『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店 1997)
- ユージーン・ナイダ/成瀬武史(訳)『翻訳学序説』(開文社出版 1972)
- 吉川幸次郎・大山定一『洛中書問』(筑摩書房 1974)
- 水野均氏ウェブサイト『通訳翻訳研究』
- <http://ux01.so-net.ne.jp/~a-mizno/a-mizuno.html>
- Baker, Mona (ed.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (London and New York: Routledge, 2000)
- Beckson, Karl (ed.), *Oscar Wilde: The Critical Heritage* (London: Routledge and Kegan Paul, 1970)
- Hermans, Theo (ed.), *The Manipulation of Literature* (London and Sydney: Croom Helm, 1985)
- Lefevere, André, *Translating Literature: practice and theory in a comparative literature context* (New York: The Modern Language Association of America, 1992)
- Munday, Jeremy, *Introducing Translation Studies* (London and New York: Routledge, 2001)
- Nida, Eugene A., *Toward a Science of Translating* (Leiden: E. J. Brill, 1964)
- Prawer, S. S., *Comparative Literary Studies: an introduction* (London: Dackworth, 1973)
- Said, Edward, *Orientalism* (London: Penguin, 1978, 1995)
- Sandulescu, C. George (ed.), *Rediscovering Oscar Wilde* (Gerrards Cross: Colin Smythe, 1994)
- Sato, Miki and Higashikawa, Yoichi, 'A Comparative Study of Salome: On the Transfer of 'Mood' from the Original English Version to the Japanese Translation' 『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編) 第 52 巻第 1 号』 2001 pp.35-52
- Toury, Gideon, *Descriptive Translation Studies – And Beyond* (Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins, 1995)
- Varty, Anne, *A Preface to Oscar Wilde* (London and New York: Longman, 1998)
- Venuti, Lawrence, *The Translator's Invisibility: A history of translation* (London and New York: Routledge, 1995)
- , *The Scandals of Translation: Towards an ethics of difference* (London and New York: Routledge, 1998)
- (ed.), *Translation Studies Reader* (London and New York: Routledge, 2000)

## 【注】

- <sup>1</sup> 亀井俊介「日本の近代と翻訳」 pp.8-11 (亀井・編『近代日本の翻訳文化』) で、日本における翻訳の特殊性について論考されている。
- <sup>2</sup> Lawrence Venuti, *The Translator's Invisibility*, p.16 で日本の翻訳輸入量の多さが示されている。
- <sup>3</sup> Ibid. p.13
- <sup>4</sup> Gideon Toury, *Descriptive Translation Studies – And Beyond*, pp.36-39
- <sup>5</sup> Mona Baker (ed.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, p.240



- <sup>6</sup> source culture という用語は translation studies では「原文が書かれた文化」という意味で一般的に用いられている。日本語訳は、水野均先生のウェブサイト『通訳翻訳 <http://ux01.so-net.ne.jp/~a-mizuno/a-mizuno.html> 内で 2002 年のみ公開されていた「通訳翻訳理論研究講義録」も参考にさせていただいた。
- <sup>7</sup> target culture という用語も、translation studies では「原文が（受容され）翻訳される先の文化」という意味あいでも用いられている。日本語訳については上記注の通り。
- <sup>8</sup> Lawrence Venuti, *op. cit.* p.20
- <sup>9</sup> Venuti, *The Translator's Invisibility*(1995)、*The Scandals of Translation* (1998)、'Translation, Community, Utopia' in Venuti (ed.) *Translation Studies Reader* (2000)など。
- <sup>10</sup> 例えば、二葉亭四迷「余が翻譯の標準」(1906)や坪内逍遙「自分の翻譯に就いて」(1928)では自らの翻譯姿勢について直訳か意識かの対立に悩む姿が示される。また、澤村寅二郎『翻譯論』(1934)などもこの二項対立について論じている。
- <sup>11</sup> 内村鑑三『外國語之研究』(1899)、杉村楚人冠「反譯か反逆か」(1932)、小宮豊隆「發句翻譯の可能性」(1932)、山宮允『譯詩論』(1934)等に代表される。
- <sup>12</sup> 例えば、内村鑑三『外國語之研究』(1899)、野上豊一郎『翻譯論』(1938)、吉川幸次郎・大山定一『洛中書問』(1944)ら多くの翻譯論に代表される。
- <sup>13</sup> Venuti, *The Translator's Invisibility*、または *The Scandals of Translation* では一貫してそう主張している。
- <sup>14</sup> Schleiermacher(1818) translated in Praver, *Comparative Literary Studies: an introduction*, p.75
- <sup>15</sup> 野上豊一郎『翻譯論』p.2
- <sup>16</sup> 同上 p.6
- <sup>17</sup> 同上 p.32
- <sup>18</sup> 吉川幸次郎・大山定一『洛中書問』pp.9-10
- <sup>19</sup> 同上 pp.40-47
- <sup>20</sup> Peter Raby は自身が編んだ Wilde の戯曲集の序で、この作品を Wilde の劇作家としての最高潮を示す作品として称讃している (Raby, 'Introduction' of *The Importance of Being Earnest and Other Plays*, p. xxv)。また、オックスフォード大学出版局がこの作品を『ヴィクトリア時代の詩と散文』と題する選集に全文を収録している (*The Oxford Anthology of English Literature : Victorian prose and poetry*, Oxford University Press, 1973)。
- <sup>21</sup> 厨川圭子訳 (1953)、西村孝次訳 (1973)、荒井良雄訳 (1976) の三編。(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』p.652-653 参照)
- <sup>22</sup> 長島伸一『世紀末までの大英帝国』pp.93-94, 174-175
- <sup>23</sup> 新井潤美『階級にとりつかれた人びと』pp.50
- <sup>24</sup> Karl Beckson, *Oscar Wilde: The Critical Heritage*, pp.133-142
- <sup>25</sup> 『まじめが肝心』p.178
- <sup>26</sup> Eugene Nida の用語(*Toward a Science of Translating* より)。日本語訳は成瀬武士訳『翻譯学序説』を参照している。
- <sup>27</sup> Nida, *Toward a Science of Translating* p.159
- <sup>28</sup> 『まじめが肝心』p.279
- <sup>29</sup> Venuti, *The Translator's Invisibility*, p.22
- <sup>30</sup> 前掲吉川・大山
- <sup>31</sup> 井村君江『サロメの変容』pp.283-294、山田勝編『オスカー・ワイルド事典』pp.652-653
- <sup>32</sup> 前掲山田 p.653-659
- <sup>33</sup> 前掲井村 p.196-197
- <sup>34</sup> 三島由紀夫「わが夢のサロメ」『三島由紀夫全集第 29 巻』
- <sup>35</sup> *Salome* の日夏訳及び日本での受容については、佐藤「文化による『サロメ』の変容」『北海道英文学第 48 号』、及び Sato, M. and Higashikawa, Y. 'A Comparative Study of *Salome*' 『北海道教育大学紀要第 52 巻第 1 号』で既に考察を行っている。
- <sup>36</sup> ソロモンの雅歌の模倣については多くの批評家が指摘している。例えば、Verty, *A Preface to Oscar Wilde* p.131, Burns, 'Salome: Wilde's Radical Tragedy' in Sandulescu (ed.) *Rediscovering Oscar Wilde* pp.32-33 など。
- <sup>37</sup> 前掲 Sato and Higashikawa
- <sup>38</sup> Edward Said, *Orientalism* p.1-6
- <sup>39</sup> 1938 年出版の日夏の最初のサロメ日本語訳であるが、本稿で引用した日夏耿之介全集採録版(1952

年出版の角川文庫からの再録)と大きな変更点は多くなく、全集の『サロメ』にも「國訳者の注意」は付されているため、考察対象にして差し支えないと考えられる。

<sup>40</sup> 前掲亀井 pp. 28-29

<sup>41</sup> Lawrence Venuti, *The Scandal of Translation*, p.82

<sup>42</sup> 例えば、André Lefevere, *Translating Literature* pp.13-14, Theo Hermans, 'Introduction: translation studies and a new paradigm' in Hermans(ed.) *The Manipulation of Literature* pp.11 など言及されている。